

Title	イブン=ホルダーズベの『諸道と諸国の書』
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学学報. 43 p.87-p.107
Issue Date	1979-02-19
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80730">https://hdl.handle.net/11094/80730</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# イブン＝ホルダーズベの『諸道と諸国の書』

竹 田 新

Ibn Khurdādhbih's Kitāb al-Masālik wa l-Mamālik (The Book of Routes and Kingdoms)

Shin TAKEDA

The Muslims developed two types of geography: one mathematical and the other descriptive. Kitāb al-Masālik wa l-Mamālik is among the earliest works of the latter type. It was compiled by Ibn Khurdādhbih, an official of the Post and Intelligence Department of the 'Abbāsid Caliphate, on the model of Pahlavi geographical treatises. It gives an outline of the major highways which connected the various provinces of the Islamic world as well as a brief description of each province. It also contains some references to non-Islamic regions including the Byzantine Empires and the Far East. The description of the four most important highways and the stations thereon is especially detailed.

An outstanding work of topography throughout the Islamic and non-Islamic worlds in the 9th century, Ibn Khurdādhbih's al-Masālik wa l-Mamālik gained a wide circulation and had an important influence upon many Muslim geographers in the later years.

## I

イスラム地理学は、「諸道と諸国の学」、「国々の奇事の学」、「経度と緯度の学」に分かれる。主体になるのは第1のものであり、9世紀中頃に Ibn Khurdādhbih イブン＝ホルダーズベが著した K. al-Masālik wa l-Mamālik 『諸道と諸国の書』がその最初の作品と考えられる。

本稿ではこの地理書を取り上げ、諸道の記述を中心にその内容を紹介してみたい。

## II

イスラムの勃興とその発展により、アラビア半島周辺に限られていた地理的知識〔古詩・コーランなどに見られる〕も拡大の一途を辿り、7世紀中頃には東は Khurāsān から西は Barqa (キレナイカ) までの地域に及んだ。更にウマイヤ朝時代になると、barīd (郵便制度) が整えられ、各地のより詳細な情報が手に入るようになった。そして地理的知識の範囲も、東は Mā Warā'an-

Nahr (トランスオクシアナ)・as-Sin'd (インダス流域), 西はal-Andalus(南スペイン)・al-Maghrib (北アフリカ)と3大陸に広がった。

こうして集まった知識・情報は、各征服地の長所を描いた報告 faḍā'il となって結実、7世紀後半にはこのfaḍā'ilが盛んに記され、本格的な地理書を生み出す下地を作った。

アッバース朝時代になると、農業と商業に力が入れられ、帝国の物質的繁栄を支えた。ムスリム商人の活動は、東はaṣ-Ṣīnシナ、西はal-AndalusからIfranja フランク、北はBulghār (ヴォルガ中流域)からar-Rūs (南ロシア)、南はaz-Zanj (東アフリカ沿岸)までに及び、彼らから日々新しい情報が入ってきた。また、ムスリム間のアラブ・非アラブの差別が消えてゆく中で、遠隔地からのメッカ巡礼が盛んになり、地理的知識は増える一方であった。

更に、帝国の物質的繁栄は学術の発達をもたらした。カリフal-Manṣūrの時代(754-74年)から古代先進諸文明の摂取・同化が熱心に行われ、カリフal-Ma'mūn時代(813-33年)には「知恵の館」でPtolemaeus(168年頃没)の天文書・地理書ほかの翻訳活動が一層進んだ。その結果、7天7地説・2大海説[共にコーラン]<sup>1)</sup>・大地鳥形説[民間伝承]<sup>2)</sup>といった伝説的な宇宙観・世界観は、学術の世界では次第に片隅に追いやられていった。即ち、al-Khuwārizmī(847年以後没)のK. Ṣūrat al-Ard『大地の姿』[Ptolemaeusの地理書に基づく]やal-Farghānī(861年以後没)のK. al-Ḥarakāt as-Samāwīyat wa Jawāmi' 'Ilm an-Nujūm『天の運動と星学集成の書』[Ptolemaeusの天文書に基づく]などの数理・天文地理書の出現により、大地は丸く、宇宙の中心を占め、不動であるというPtolemaeusの説が、7天7地説を組み込む形で採用されることになった。

こうした中で、地誌的地理書も現れ始め、Ibn al-Kalbī(820年頃没)がK. al-'Ajā'ib al-Arba'『4奇談集』など10篇を著し、al-Jāhiz(869年没)もfaḍā'ilを取り入れたK. al-Buldān『国々の書』ほかを物した。

そして、本稿で扱うイブン=ホルダーズベの『諸道と諸国の書』が登場してくる。<sup>3)</sup>これはQudāma(932年以後)のK. al-Kharāj wa Ṣan'at al-Kitāba『租税と書記術の書』やal-Jayhānī(942年没)の『諸道と諸国の書』などと共に、barīd 又は masālik (道程)・kharāj (租税)・thughūr (辺境)の情勢という行政の3大テーマに重きを置いた実用本位の、いわば行政官の必携書である。

それ故、「諸道と諸国の学」の始まりを、地誌としてのまとまりを見せるal-Ya'qūbī(897年没)の『国々の書』とする意見もある。<sup>4)</sup>10世紀に入ると、この地理学はal-Balkhī(934年没)のK. Ṣuwar al-Aqālīm『諸地方の図』以下、al-Iṣṭakhrī(951年以後没)とIbn Hawqal(977年以後没)の両『諸道と諸国の書』、al-Muqaddasī(1000年没)のK. Aḥsan at-Taqāsīm fī Ma'rifat al-Aqālīm『諸地方の知識に関する最良の分類の書』と体系的な地誌を生み出し、その最盛期を迎える。<sup>5)</sup>

これら官吏・学者の地理学に対し、第2の地誌的地理学「国々の奇事の学」はadīb(文人)の地理学と呼ばれ、教養のためのものである。Ibn al-Kalbīとal-Jāhizの書からIbn al-Faqīh(903年以後)の『国々の書』を経て、10世紀にはal-Mas'ūdī(956年没)のK. Murūj adh-Dhahab wa Ma'ādin al-Jawhar『黄金の牧場と宝石の鉱山』ほかへと発展してゆく。この地理学には、作者未

詳の *Akhbār as-Ṣīn wa l-Hind* 『シナとインドの情報』(851年) と *Abū Zayd* (916年以後没)によるその『補編』, *Ibn Faḍlān* (922年以後没)による *Bulghār* の『報告』, *Abū Dulaf* (942年以後没)の *K. ‘Ajā’ ib al-Buldān* 『国々の奇談集』, *Buzruj* (953年以後没)の *K. ‘Ajā’ ib al-Hind* 『インドの奇談集』などの見聞録も含まれる。

最後に、数理・天文地理学「経度と緯度の学」はその後 *al-Battānī* (929年没)の *az-Zīj as-Ṣābi’ī* 『サービア天文表』を生み、11世紀の *Ibn Yūnus* (1009年没)による *az-Zīj al-Ḥakīmī al-Kabīr* 『ハーキム大天文表』や *al-Bīrūnī* (1048年没)による *K. al-Qānūn al-Mas‘ūdī fi l-Hay’at wa n-Nujūm* 『マスウード天文法典』更には *az-Zarqālī* (1087年没)編の *Jadāwil Ṭulayṭula* 『トレード表』などへと繋がってゆく。

以上、イブン＝ホルダーズベの地理書が生まれるまでのイスラム地理学の歩み、及びその後の黄金期〔地誌的地理学10世紀、数理・天文地理学11世紀〕に至るまでの流れを概観した。

### III

イブン＝ホルダーズベの名で知られる *Abu l-Qāsim ‘Ubayd Allāh* は820年頃 *Khurāsān* に生まれる。祖父ホルダーズベは、アッバース朝の宰相 *Barmak* 家の要請でゾロアスター教からイスラム教に改宗したペルシア人であり、父は *Ṭabaristān* (カスピ海南岸)の知事を務めたことがあった。バグダードで文芸の教育を受け、官吏となる。*al-Jibāl* (メディア)の駅逓局長を務めた後、バグダード及び *Surra Man Ra’ā* サーマッラーで駅逓業務に携わる。カリフ *al-Mu‘tamid* (在位870–92年)の愛顧を得て宮廷サロンで活躍、大宮人の教養書数種を著す。<sup>6)</sup> 没年は885年頃とも912年頃とも言われる。<sup>7)</sup>

彼がアッバース家のアミールの依頼により執筆した『諸道と諸国の書』は、駅逓官としての豊富な知識を基に、官庁の公文書を利用してまとめたものである。初版は846年頃、増補改訂版は885年頃とされている。<sup>8)</sup>

完全なものは伝わっておらず、本稿では *M. J. de Goeje* が *Bibliotheca Geographorum Arabicorum* 第6巻として出版したもの (*Leiden* 1889年)をテキストに使用する。他に *C. Barbier de Meynard* が *Journal asiatique* 第5巻6号に掲載したもの (*Paris* 1865年)がある。

### IV

本書は7部からなり、1部は大地の特質 [*Ptolemaeus*に基づく]と各地住民の *qibla* (礼拝方角) [北から右回り]について略述する。2部は「*al-‘Irāq* の中心」*as-Sawād* (南メソポタミア)に関して、*Hulwān*・*Kaskar* などその12 *kūra* (地方)が含む *ṭassūj* (地域)、各 *ṭassūj* の見積り [*rust-āq* (地区)・穀倉・小麦・大麦・銀貨]、各時代の租税 [*Qabādh* から *‘Umar b. al-Khaṭṭāb* を経て *al-Ḥajjāj* まで、単位 *dirham* 銀貨]を記す。<sup>9)</sup> 最後にペルシア中心の世界の王達とその称号に言及する。

3 部はal-Mashriq(東方)の情報である。Khurāsānの4管区に続いて、先ず(1)「平安の都」(バグダード)からMarw・Khurāsānの果て: ash-Shāsh(Tashkand)・at-Turkと、Farghānāへの道、及びal-Jabalの諸kūra [Māsabadhān・Mihrajānqadhaq・ad-Dīnawar・Nihāwand・Hamadhān・Qumm]とad-Dīnawarの租税, Iṣbahānの諸rustāq [Qāsān・Qumm・Sāwaほか]と租税, Naysābūr・Bukhārā・Samarqandの各都市圏 [Juwayn・Bayhaqなど, Karmīniya・Firabrほか, ad-Dabūsiya・Kiss・Nasaf・Khujandaなど], at-Tughuzghuz可汗の町と住民 [12鉄門・Zanādiqa(マニ教徒)]・al-Atrāk(チュルク諸部族) [al-Kīmāk・al-Ghuzz・al-Bajānākペチュネグ・at-Turkish・Khifshākhキプチャク・Khirkhīzキルギス・al-Kharlukhなど]・Fārāb(Utrār)の町 [ムスリムとal-Kharlukh双方の駐屯地], 更には(2)Marwからaṣ-ṢaghāniyānやṬukhāristānへの道, ‘Abd Allāh b. Ṭāhirに委託のKhurāsān以東211-12年<sup>10)</sup> [ヒジュラ暦]の租税, Khurāsān・al-Mashriq諸王の称号, (3) al-Mashriq道の宿駅について記録する。

次いでal-Ahwāz(ホズイスターン)の諸kūra [Sūq al-Ahwāz・Rām Hurmuz・Īdhaj・‘Askar Mukram・Tustar・as-Sūsなど]と租税, (4) Sūq al-AhwāzからFārisへの道, Fārisの5kūra: ShīrāzのArdashīr Khurra・Sābūr・Iṣṭakhr・Darābjird・Arrajānの各rustāq [Jūr・Tawwaj・Sīrāfほか, an-Nawbandajān・Kāzīrūn・Dast Bārīn・Dādhīnほか, al-Bayḍā’・Mā’īn・Abarqūhほか, Fasā・Nīrīz・Furj・Tārumなど, Rīshahr・Furzukなど]と(4’) Shīrāzからの距離, Fārisのal-Akrād(クルド人)野营地, Fārisの租税, (5) ShīrāzからKirmān・Sijistānへの道と両州の町々 [Jīruft・as-Sīrajānなど, Zaranj・al-Qarnīn・ar-Rukhkhajほか], (6) ShīrāzからNaysābūrへの道, (7) ShīrāzからDarābjirdへの道, (8) Iṣṭakhrからas-Sīrajān以遠への道, (9) al-Fahrajからas-Sindへの道とal-Multān [黄金館の辺境], as-Sindの地 [Mukrān・al-Qandahār・Quṣḍār・Qandābīl・Fannaz-būr・ad-Daybul・Kanbāya・Sadūsān・al-Multān・Sindān<sup>11)</sup>ほか]と租税, al-Bahlawī<sup>11)</sup>バハラヴィー一人の地 [ar-Rayy・Iṣbahān・Qazwīn・Zanjān・ad-Daylamなどとal-Jabal]とQazwīnの租税, (10) al-AhwāzからIṣbahānへの道, (11) FārisからIṣbahānへの道, (12) Iṣbahānからar-Rayyへの道, (13) Baghdādからal-Baṣraへの道, (14) Surra Man Ra’āからWāsiṭへの駅通道とWāsiṭの人頭税・al-Baṣraの救貧税, (15) al-Baṣraから‘Umānへの海岸道の記述が来る。

最後に(16) al-Baṣraから‘Adanへの海路と大東海(アラビア海) [龍涎香・各種の奇魚], (17) al-Baṣraから東方へのFāris沿海路とas-Sindの物産 [コストス・籐・竹], (17’) al-Hind航路 [Mulayの胡椒, Sarandīb(セイロン) [アダム峰, 各種の宝石と香料]・ar-Rāmī島 [オランウータン]・az-Zābaj(シュリービジャヤ王国) [龍腦], (17’’) aṣ-Ṣīn航路 [Alankabālūs(ニコバル)島の鉄交換, Jāba王の仏陀崇拜, 各種沈香], 及びal-Hind諸王 [al-Balharā以下, 禁酒とQimārクメール王以外の許姦, 巨象愛好, Qāmarūn(アッサム)の犀角]・az-Zābaj王 [al-Maharāj, 黄金と鬬鶏], al-Hindの町々 [Qandahār・Qashmīrなど], aṣ-Ṣīn [港は大河々口, 300の町]・al-Wāqwāq [黄金]・潮の干満・ash-Shīlā新羅 [別天地], 東海の物産 [aṣ-Ṣīnの絹・麝香・鞍・陶磁器・肉桂・高良薑, al-Wāqwāqの黄金・黒檀, al-Hindの沈香・白檀・龍腦・各種香辛料・椰子の実・織物・象, Sarandīb

の各種宝石・真珠・金剛砂, Mulay と Sindān の胡椒, Kala の錫, 南方の蘇枋木・弟切草, as-Sind の物産]・al-Yaman の物産 [縞織物・龍涎香・うこん], al-Hind の 7 種姓 [ash-Shāktharīya・al-Bar-āhima・al-Kusatrīya・ash-Shūdriya・al-Bayshīya・as-Sandālīya・adh-Dhunbīya] と妖術について描写する。

4 部は al-Maghrib (西方) の情報である。先ず(18)「平安の都」から al-Fuṣṭāṭ・al-Maghrib への道, 及び Diyār Muḍar・al-Furāt ユーフラテス・amal (地方)・al-Khābūr・Qinnasrīn と al-‘Awāṣim・Himṣ と海岸地帯・Dimashq ダマスカス・al-Urdunn ヨルダン・Filastīn パレスティナ・Miṣr (エジプト) の各地 [ar-Raqqā・Harrān・ar-Ruhā・Sumaysāt ほか, Qarqīsiyā・Hīt・al-Hadītha など, as-Sukayr・‘Arābān ほかの町, Sarmīn・Halab ほかと Manbij・Antākiya・Bālis・ar-Ruṣāfa などの kūra, Hamāt・Shayzar・Kafartāb・Jūsiya・Salamīya・Tadmur ほかの iqlīm (地域) 及び al-Lādhiqīya・Jabala・Antarsūs ほかの kūra, al-Ghūṭa・Ba‘labakk・Ṭarābulus・Bayrūt・Ṣaydā・al-Bathanīya・Hawrān (主都 Buṣrā)・al-Jawlān・al-Balqā’ (主都 ‘Ammān)・al-Ghawr・Jibāl・ash-Sharāt などの kūra や iqlīm, Ṭabarīya・Baysān・‘Akkā・Qadas・Ṣūr などの kūra, ar-Ramla・Īliya 即ち Bayt al-Maqdis (イェルサレム)・Yāfā・Qaysārīya・Nābulus・‘Asqalān・Ghazza・Bayt Jibrīn などの kūra と「臭い湖」(死海), al-Fayyūm・Ahnās・Ṭahā・al-Ushmūnayn・Suyūt・al-Bahnasā・Ikhmīm・Hū と Qinā・Qifṭ・Isnā・Uswān・al-Iskandariya・al-Qulzum・Kharbitā・Sakhā・Ikhnā と Rashīd・Tin-nīs・Dimyāt・al-Faramā・Tarnūt・Shatnūf・Damīra ほかの kūra] と租税 [Qinnasrīn と al-‘Awāṣim 以降の単位 dīnār 金貨, Miṣr はファラオからウマイヤ朝・アッバース朝の時代まで], Aghlab 朝・Rustam 朝・Idrīs 朝・(後)ウマイヤ朝などの領地 [al-Qayrawān・Qābis・Qafṣa・Tūnus ほか, Tāhart ほか, Tilimsīn・Ṭanja・Fās・Walīlā ほか, Qurtuba・Gharnāṭa グラナダ・Arbūna ナルボンヌ・Ṭulayṭula・Saraqusta サラゴサなど al-Andalus<sup>12)</sup>], al-Barbar の各地 [Hawwāra・Zanāta・Ṣanhāja・Kutāma・Maṣmūda ほか] とその歴史, 西海の物産 [各種奴隸・海狸の皮・珊瑚] 2 閤海 [Tūliya トウーレ, 「幸福の島々」(カナリア諸島)], 大地の区分について記載する。

次いで(19) Baghdād から al-Mawṣil 経由 ar-Raqqā への道及び al-Mawṣil・Diyār Rabī‘a の各 kūra [Ta-krīt・as-Sinn・al-Hadītha ほか, Naṣībīn・Arzan・Āmid・Ra’s ‘Ayn・Mayyāfāriqīn・Balad・Sinjār など] と租税 [単位 dirham 銀貨], (20) Naṣībīn から Arzan への右道, (21) Āmid から ar-Raqqā への左道, (22) Balad から Sinjār・Qarqīsiyā への左道, (23) ar-Raqqā から al-Jazīra (北メソポタミア) 辺境への道と辺境各地 [Malatiya・Zibaṭra・al-Hadath・Mar‘ash・Kamakh・Ḥiṣn Manṣūr など], (24) ‘Ayn at-Tamr から Buṣrā への道, (25) al-Jazīra から海岸への道, (26) ar-Raqqā から ar-Ruṣāfa 経由 Himṣ・Dimashq への道, Himṣ から Ba‘labakk 経由 Dimashq への駅連道, (27) al-Kūfa から Dimashq への道, (28) Halab から ash-Sha’m (シリア) 辺境への宿駅と辺境周辺 [‘Ayn Zarba・al-Hārūniya・al-Kanīsa など], (29) 「安全の隘路」(ギリキア隘路) から al-Qusṭantīniya コンスタンティノープル海峡(ボスポラス海峡)への道, (30) al-Badhandūn (Podandos) からの別道と海峡 [al-Khazar 海(黒海)から ash-Sha’m 海(地中海)まで], ar-Rūm (ビザンツ)の帝都 [Rūmiya ローマ・Niqu-

mūdiya から] al-Qusṭantīniya [各種の城壁, 100の門, 8000名の守備隊], Tarāqiya トラキア・Maqadūniyaマケドニア・al-Ubsīq オプシキオン・Tarqasīs トラケシオン・an-Nāṭulūs アナトリコン・al-Arminiyaq アルメニアコン・Salūqiya セレウケイア・al-Qabāduq カッパドキアなど ar-Rūm の 14 ‘amal [al-Jarmī<sup>13)</sup> による, 位置・城塞] と「ar-Raqīm の持主達」[カリフ al-Wāthiq 派遣の占星術師 Muḥammad b. Mūsā<sup>14)</sup> が報告], ar-Rūm の 12 貴族 [al-Qusṭantīniya 6 名, ‘Ammūriya (Amorion)・Anqura・al-Arminiyaq・Tarāqiya・Siqilliya シチリア・Sardāniya 各 1 名]・皇帝[非世襲制, 紫衣・赤靴]・兵隊, 「安全の隘路」から ar-Raqīm 峡谷への旅, ar-Rūm の税制 [200 mudy (ブッシェル) に毎年 3 dīnār, 収獲物 10 分の 1 税・人頭税・炉税] 兵制 [兵籍簿 120000 名, 10000—5000—1000—200—40—10 名単位], ar-Rūm の島々 [Qubrus キプロス・Iqrīṭish クレタ・Siqilliya など]・将兵の給与・競馬, (31) Lu’lu’a からの左道, (32) 「安全の隘路」から ‘Ammūriya への道, Rūmiya の特質と ‘ajā’ib (奇事) [2 重城壁, 円柱ほか黄銅造物, 種々の教会], 世界の 4 ‘ajā’ib [‘Amr b. al-‘Āṣ<sup>15)</sup> による, al-Iskandariya の燈台ほか], (33) al-Maghrib 道の宿駅, 海岸の ar-Rūm 廃墟都市 [Qurqush・Sabastīya・Salūqiya など] などについて記述する。

5 部は al-Jarbī (北方) の情報である。al-Jarbī の領域に続き, (34) Ādharbayjān・Armīniya への駅通道, 及び Ādharbayjān の町々・諸 rustāq [al-Marāgha・al-Miyānij・Ardabīl・Warthān・Sīsar・Barza・Tabrīz・Marand・Khuwī・Mūqān・Barzand・Urmiya・Salmās・ash-Shīz など], (35) ad-Dīnawar から Barzand ほかへの道と Ādharbayjān の租税 [単位 dirham 銀貨], (36) Muḥammad b. Ḥumayd の辿った道, (37) Armīniya への道及び第 1～第 4 Armīniya 各地 [Arrān・Tiflīs・Bardha‘a・al-Baylaqān・Shirwan など, Jurzān グルジア・al-Lakz など, Dabīl・Nashawā (Nakhchivān) など, Shimshāt・Khilāt・Qālīqalā (Erzerum) など] とその歴史, al-Qabq カフカスの「諸門」とモーセ物語 (al-Khiḍr) 及び Armīniya の租税, (38) Jurjān～Khamlīj 間の道と al-Khazar の町々 [Khamlīj など] 及び al-Bāb (Darband) の後方 [as-Suwar・al-Lān・as-Sarīr など] について述べる。

6 部は at-Tayman (南方) の情報である。「平安の都」の収入に続いて, (39) 「平安の都」から al-Madīna と Makka への道, 及び al-Madīna の歴史と属地 [Taymā’・Dūma・Dhū al-Marwa・Wādī al-Qurā・Madyan・al-Ḥadīqa・as-Sayāla ほか], (40) アッラーの使徒 (マホメット) の聖遷道, 聖域の境界と聖堂・神殿, Najd・Tihāma の Makka 諸 mikhlāf (地方) [at-Ṭā’if・Najrān・Qarn al-Manāzil・‘Ukāz・Tabāla・Jurash・as-Sarāt ほか, ‘Asham・Baysh など], (41) Makka から at-Ṭā’if への 2 道, (42) Makka から al-Yaman への道, al-Yaman の諸 mikhlāf [Ṣan‘ā’・Ṣa‘da・Khaywān・Khawlān Dhī Suḥaym・Ṣudā・Ma‘rib・Ḥaḍramawt・Dhimār・‘Adan Abyan・ath-Thujja・al-Janad・Banū Mājīd・ar-Rakb・Zabīd・Rima‘・Alhān・Jublān ほか] と (42’) Ṣan‘ā’ からの行程, (43) Ṣan‘ā’ 中心の宿駅と al-Yaman の 3 管区 [al-Janad・Ṣan‘ā’・Ḥaḍramawt], al-Yaman の建造物 [刻文], (44) Masjīd Sa‘da から al-Baṣra への道, (45) al-Baṣra から Makka への道, (46) al-Yamāma から Makka への道, (47) ‘Umān から Makka への海岸道, (48) Khawlān Dhī Suḥaym から Makka への道, (49) Miṣr から Makka への

道、(50)DimashqからMakkaへの道、(51)al-Baṣraからal-Yamāmaへの道、al-Yamāmaの属地 [Hajr・al-‘Ird・al-Majāza ほか]、al-Baḥraynの村々 [al-Khatt・al-Qaṭīf・Hajar・Juwāthā ほか]、(52) al-Yamāmaからal-Yamanへの道について叙述する。

7部は先ず帝国の駅遞[930駅、年費159100 dīnār]、al-Yahūd(ユダヤ人) ar-Rādhāniya 商人の路 [Firanja → al-Faramā → al-Qulzum → al-Jār・Judda → as-Sind・al-Hind・aṣ-Ṣīn, Firanja → Antākiya → al-Jābiya → Baghdād → al-Ubulla → ‘Umān・as-Sind・al-Hind・aṣ-Ṣīn], ar-Rūs商人の路[Ṣaqlaba スラヴィアの果て → ar-Rūm|海(地中海), Tanays(ドンとヴォルガ) → Khamlīj → Jurjān 海(カスピ海) → Baghdād], 彼ら(ユダヤ商人)の陸路 [al-Andalus・Firanja → as-Sūs al-Aqṣā → Tanja → Ifrīqiya → Miṣr → ar-Ramla → Dimashq → al-Kūfa → Baghdād → al-Baṣra → al-Ahwāz → Fāris → Kirmān → as-Sind → al-Hind → aṣ-Ṣīn, Rūmiya 後方 → Khamlīj → Jurjān 海 → Balkh・Mā Warā’ an-Nahr → Tughuzghuz の wurut ユルト → aṣ-Ṣīn], 居住地の4部割 [西: Arūfā ヨーロッパ, 南: Lūbiya リビア, 東: Ityūfiyā エチオピア, 北: Isqūtiyā スキティア] について記す。

次いで大地の‘ajā’ib [ar-Rūmの al-Mustaṭīla や al-Hijāz・al-Yamanの雨, al-Andalusの禁閉の館と王ロドリゴ], 自然界の4分類 [空気・火・大地・水など], 建造物の‘aja’ib [Ibn Ṭulūnの解放奴隷 Lu<sup>16)</sup>lu’の書記が語るピラミッドの発掘, ‘Ayn Shamsの円柱, ar-Rūmの教会建築], Yajūj ゴグ・Majūj マゴグの堰の特質[al-Wāthiq派遣の通訳 Sallāmが探検報告, 往路: Surra Man Ra’ā → Armīniya → as-Sarīr・al-Lān → al-Khazar →, 復路: → al-Lub ロブ → (下 Nūshajān) → Samarqand → Isbījāb → Usrūshana → Bukhārā → Tirmidh → Naysābūr → ar-Rayy → Surra Man Ra’ā], 国々の自然の‘ajā’ib [at-Tubbat チベットでの喜笑ほか al-Jāhīzの引用, ペルシア各地の faḍā’il], 水の変化の‘ajā’ib, 山岳の‘ajā’ib [al-‘Arj 連峰], Kisrā(ペルシア皇帝)の関所, 河川の水源と流道 [Jayhūn(アムダリア)・Mihrān(インダス)・al-Furāt・Dijla(チグリス)・Miṣrの(an-) Nīl ナイルほか], Jayhūn 流域と Khuṭṭal 馬 [al-Hārith b. Asadの息子の馬飼いが陳述], その他の‘ajā’ib [Kiss 後方の連山の雪及びその泉の精達と羊飼い, Ibn al-Kalbīから引用の下 al-Fallūjaの町々] について言及する。

## V

諸道の記述を再現する。

(1) Baghdād—4—<sup>17)</sup>an-Nahrawān—4—Dayr Bāzamā—8—ad-Daskara—7—Jalūlā—7—Khāniqīn—6—Qaṣr Shīrīn—5—Ḥulwān—4—Mādharwāstān—6—Marj al-Qal‘a—4—Qaṣr Yazīd—6—az-Zubaydiya—3—Khushkārīsh—4—Qaṣr ‘Amr—3—Qarmīsīn—9—ad-Dukkān—7—Qaṣr al-Luṣūṣ—7—Khundādh—3—Q.<sup>18)</sup> al-‘Asl—5—Hamadhān—5—Darunawā—5—Būzanajird—4—Zarah—4—Ṭazra—4—al-Asāwira—3—Būstah・Rūdhah—4—Dāwud-abādh—3—Sūsanaqīn—4—Darwadh—5—Sāwa—9—Mushkūya—8—Qusṭāna—7—ar-Rayy—4—Mufaḍḍal-abādh—6—Kāsib—8—Afrīdhīn—6—al-Khuwār—7—Qaṣr al-Milh—7—Ra’s al-Kalb—8—Simnān—9—Ākhurīn—8—Qūmis



—7—al-Ḥaddāda—7—Badhash—12—Maymad—7—Haftakand—7—Asad-abādh—  
 6—Bahman-abadh—6—an-Nūq—6—Khusrawjird—6—Ḥusayn-abādh—5—Sankardar  
 —5—Biskand—5—Naysābūr—4—Baghīs—6—al-Ḥamrā’—5—Ṭūs の al-Muthaqqab  
 —5—an-Nūqān—6—Mazdūrān—8—Abkīna—6—Sarakhs—3—Qaṣr an-Najjār—5—  
 Ushturmaghāk—6—Talistāna—6—ad-Dandānaqān—5—Yanūjird—5—Marw ash-Shāhijān ,  
 Qaṣr Shīrīn—2—Dīzkurān—18—Shahrazūr, ad-Dukkān—Mādhārān—Nihāwand  
 —→ Iṣbahān, Hamadhān—40—Qazwīn, ar-Rayy—27—Qazwīn—12—Abhar—15—  
 Zanjān

Marw—5—Kushmāhan—6—ad-Dīwāb—6—al-Manṣaf—8—al-Aḥsā’—3—Bi’r  
 ‘Uthmān—8—Āmul—1—Nahr Balkh 岸—1—Firabr—6—Ḥiṣn Umm Ja‘far—6—  
 Baykand—2—Bukhārā 壁門—1.5—Māstīn—1.5—Bukhārā—4—Shargh—3—Ṭawāwīs  
 —6—Kūkshībaghan—4—Karmīniya—5—ad-Dabūsiya—5—Arbinjan—5—Zarmān—  
 5—Qaṣr ‘Alqama—2—Samarqand—4—Bārkaṭh—4—Khushūfaghan—5—Būrnamadh  
 —4—Zāmīn—7—Khāwaṣ—9—Nahr ash-Shāsh 岸—Banākit—4—Nahr Turk—  
 Shuṭūrkaṭh—3—Banūnkaṭh—2—ash-Shāsh—7—Ma‘din al-Fiḍḍa (銀山: Īlāq · Balānkank)  
 —2m.—Bāb al-Ḥadīd (鉄門)—2—Kubāl—6—Gharkard—4—Isbijāb—4—Shārāb—  
 5—Badūkhkat—4—Tamtāj—4—Abārjāj—6—河畔の宿—5—Juwīkat—3—Ṭarāz—  
 3—下 Nūshajān—2—Kaṣrā Bās—4—Kūl Shūb—4—Jūl Shūb—4—Kūlān—4—Birkī  
 —4—Asbara—8—Nūzkat—4—Kharanjawān—4—Jūl—7—Sārigh—4—M. Khāqān  
 at-Turkashī—4—Nawākat—3—Kubāl—15 日—上 Nūshajān, Ṭarāz—7—Kuwīkat  
 —80 日—Kīmāk 王の居所

Zāmīn—2—Sābāt—6—Ghalūk—4—Khujanda—5—Šamghār—4—Khājistān—7  
 —Turmuqān—3—M. Bāb—4—Farghāna—10—M. Qubā—10—M. Ūsh—7—  
 Ūzkand—1 日—al-‘Aqaba (坂)—1 日—Aṭbāsh—6 日—上 Nūshajān—3 月—M. Khāqān  
 at-Tughuzghuz, Sābāt—7—Usrūshana

(2) Marw—7—Fāz—6—Mahdī-abādh—7—Yaḥyā-abādh—5—al-Qarīnayn—7—Asad-  
 abādh—6—Ḥawzān—4—Qaṣr al-Aḥnaf b. Qays—5—Marw-ar-rūdh—5—Araskan—7—  
 al-Asrāb—6—Kanj-abādh—6—at-Ṭālaqān—5—Kashāb—5—Arghīn—5—Qaṣr Khūṭ—  
 5—al-Farayāb—9—al-Qā’—9—ash-Shubūrqaṅ—6—as-Sidra—5—Dasta Kird—4—  
 al-Ghūr—3—Balkh—5—Siyāh-jird—7—Jayḥūn (Nahr Balkh) 岸—at-Tirmidh

at-Tirmidh—6—Šarmanjān—6—Dārazanjī—7—Baranjī—5—aṣ-Ṣaghāniyān—6—  
 Būndhā—7—Hamawārān—8—Abān Kasawān—5—Shūmān—4—Wāshjird—4 日—ar-  
 Rāst

Balkh—5—Walārī—5—M. Khulm—6—Bahār—5—Bakbānūl—7—Qāriḍ ‘Ām

(3) Surra Man Rā'ā—12 駅—ad-Daskara, M. as-Salām—10 駅—ad-Daskara—4 駅—  
Jālūla—10 駅—Ḥulwān—9 駅—Naṣīr-abādh—6 駅—Qarmīsīn—10 駅—Khundādh—  
3 駅—Hamadhān—21 駅—Mushkūya—11 駅—ar-Rayy—23 駅—Qūmis—19 駅—  
Naysābūr

Ḥulwān—9 駅—Shahrazūr, Ḥulwān—7 駅—as-Sīrawān, as-Sīrawān—4 駅—aṣ-  
Ṣaymara, Hamadhān—47—Qumm, az-Zarqā'—3 駅—Qumm, Qumm—16 駅—Iṣbahān,  
Mādhārān—3 駅—Nihāwand, M. as-Salām—25 駅—Wāsiṭ—20 駅—Sūq al-Ahwāz—  
20 駅—Arrajān—17 駅—an-Nawbandajān—12 駅—Shīrāz—5 駅—Iṣṭakhr

(4) al-Ahwāz—6—Azam—5—'Abdīn—6—Rām Hurmuz—6—az-Zuṭṭ—8—Dihlīzān  
—8—Arrajān—5—Dāsīn—6—Bandak—6—Khān Ḥammād—4—ad-Darkhūyid—8 か  
6—an-Nawbandajān—5—Karjān—7—al-Kharrāra—5—Juwayn—5—Shīrāz

(4') Sūq al-Ahwāz—水上 18<sup>19)</sup>—Dawraq, Shīrāz—30—M. Fasā, Fasā—18—Darābjird,  
Shīrāz—20—M. Jūr, Jūr—7—al-Bayadā', an-Nawbandajān—23—Shīrāz, Shīrāz—20  
—Sābūr, Shīrāz—4—Zarqān—8—Iṣṭakhr

(5) Shīrāz—7—ar-Rādiyān—2—Khurrama—4—al-Barānjān—6—Kānd—6—al-Ḥīra  
—5—Bi'r 'Uqba—8—al-Mīskānāt—8—Ṣāhik—7—Sarūshak—7—Shahr Bābak—8—  
Qaṣr an-Nu'mān—4—Q. Abān—4—al-Marjān—(4)—Bīmand—4—M. as-Sīrajān—6—  
Quhistān—6—Qarāṭa—6—Rustāq—4—M. Khannāb—5—al-Ghubayrā—5—Khān  
Jūzān—6—Khān Khawkh—7—Sarwistān—5—M. Dīrūzīn—9—Bamm—7—Narmāshīr  
—7(4)—al-Fahraj—8—al-Aḥsā' · al-Ābār—9—Jurj—7—Ribāṭ Ba'ida—9—Isbīdh—8  
—Kirāghān—8—Bi'r al-Qaḍī—6—Rāshid—4—Kāwnīshak—8—Bardīn—5—Jārūn—  
6—M. Sijistān, M. Sijistān—80—M. Harāt

(6) Shīrāz—6—az-Zarqān—2—Qanṭara al-Kūsajān—4—Iṣṭakhr—3—Burd—9—宿  
—5—Jah—4—al-Karjār—5—Kurkūlān—7—Hindasak—3—Mihr-abādh—3—  
Abarkūya—10—Mahājir—15—Qaṣr al-Asad—7—Qaṣr al-Jūz—5—al-Qal'a—6—M.  
Yazd—6—Anjīra—13—Kharāna—12—Sāghand—8—Ribāṭ Muḥammad b. Yazdād—6  
—Khān Ushturān—7—al-Ḥabā'ik—4—Jawārān—4—Ṭamajarhān—8—aṭ-Ṭabasayn—  
4—Q. Muḥammad b. Khurrazādh—4—Sarkhadh—12—Afrīdhūn—12—Zanjī—4—  
aṭ-Ṭuraythīth—8—Khāksīr—4—Qu. Quhistān—6—al-Huwār—6—Aqbarsih—6—  
Naysābūr, M. Naysābūr—80—M. Harāt

(7) Shīrāz—3—Q. Bakkār—4—Q. ar-Rummān—9—Khawristān—5—Kurm—4—M.  
Fasā—4—Ṭamastān—6—al-Fustakān—4—Fasā-rūdh—8—Darābjird

(8) Iṣṭakhr—7—Ḥafar—5—al-Buḥayra (湖)—7—Usbinjān—4—Q. al-Ās—6—大 aṣ-  
Ṣāhik—9—Q. al-Milḥ—8—Mūriyāna—3—Rawān—10—al-Marjān—3—ar-Rawth—2

—Farmān—11— as-Sīrajān, al-Marjān—4— M. Bīmand—4— M. as-Sīrajān—6—  
 al-Arḥā’—4— Astūr—8— Khān Sālim—8— Bi-akhtah—12— Wādī Quhandiz—4—  
 Isbīdhana—4— al-Ma’din—4— ar-Ribāt—4— Jīruft, Jīruft—20— Bamm—20—  
 Nahr Sulaymān—50— ad-Dihqān—→ Mukrān · al-Manṣūra · as-Shind の地

(9) al-Fahraj—10— aṭ-Ṭābirān—14— Bāsūrajān—10— Q. Yaḥyā b. ‘Amr—10— Hadhār  
 —10— Mudr—9— Mūsāra—9— Darak Bāmūya—10— Tujīn—20— Muqāṭa’a al-Balūṣ—  
 6— al-Jabal al-Māliḥ (塩山)—9— an-Nakhl—6— Qalamān—4— Sarāy Khalaf—3—  
 Fannazbūr—20— Ḥays—10— Sarāy Dārān—10— al-Jītha—10— Quṣḍār, Quṣḍār—40  
 —al-Jūr—40— Asrūshān—28— Q. Sulaymān b. Sumay’—80— al-Manṣūra, Zaranj—  
 2月—al-Multān

(10) Īdhaj—3— Jawārdān—4— Rustājird—6— Salīdast’—5— Buwayn—6— Sūjar—7  
 —ar-Ribāt—7— Khān al-Abrār—7— Iṣbahān

(11) Fāris—5— Kām Fayrūz—5— Kūrad—4— Tajāb—5— Samāram—5— Siyāh—7—  
 al-Būrjān—6— Kībālī— Khān al-Abrār— Iṣbahān

(12) al-Yahūdīya—3— Burkhawār—7— Ribāt Wazz—5— Anbāriz—6— Ad’āfa—4— ad-  
 Dāfar—5— Bādh—5— Abrūz—9— Ḥawāḍir—5— al-Maqṭa’a—9— Qārīṣ—7— ad-Dayr  
 —7— Dizah—7— ar-Rayy, Qārīṣ—6— Qumm

(13) Baghdād— al-Madā’in— Dayr al-‘Āqūl— Jarjarāyā— Jabbul— Fam aṣ-  
 Ṣiḥ— Wāsiṭ— Nahrābān— al-Fārūth— Dayr al-‘Ummāl— al-Ḥawānīt—  
 al-Qaṭr— al-Baṭā’ih— Nahr Abi l-Asad— Dijla al-‘Awra’— Nahr Ma’qil—  
 Fayḍ al-Baṣra

(14) Surra Man Ra’a—9 駅— ‘Ukbarā—6 駅— Baghdād—3 駅— al-Madā’in—8 駅—  
 Jarjarāyā—5 駅— Jabbul—8 駅— Wāsiṭ

(15) al-Baṣra— ‘Abbādān— al-Ḥadūtha— ‘Arfaḡā— az-Zābūqa— al-Miqarr  
 — ‘Aṣā— al-Mu’arras— Khulayja— Ḥassān— al-Qurā(村々)— Musayliḡa  
 — Ḥamad— Hajar 海岸— al-‘Uqayr— Qaṭar— as-Ṣabakha— ‘Umān

(16) al-Baṣra—12— ‘Abbādān—2— al-Khashabāt—70— M. al-Baḥrayn—150— ad-Durdūr  
 —50— ‘Umān—200— ash-Shiḥr—100— ‘Adan

(17) al-Baṣra—50— J. Khārak—80— J. Lāwān—7— J. Abrūn—7— J. Khayn—7— J.

Kīs—18— J. Ibn Kāwān—7— Urmūz—7 日— Thārā—8 日— ad-Daybul—2— Mihrān 河口

(17’) Mihrān—4 日— Ūtakīn—2— Kūlī—18— Sindān—5 日— Mulay—2 日— Ballīn  
 —2 日— Bābattan—1 日— as-Sinjilī · Kabashkān—3— Kūdāfarīd 河口—2 日— Kaylakān  
 · al-Lawā · Kanja—10— Samandar—12— Ūranshīn—4 日— Abīna, Ūtakīn—2— al-  
 Mayd

(17") Ballīn—(1日—Sarandīb—10～15日)—J. Alankabālūs—6日—J. Kala, J. Kala  
—2日—J. Balūs—2—J. Jāba・Shalāhiṭ・Harlaj—15日—香料生育地, Jāba—  
Māyit

Māyit—J. Tiyyūma—5日—Qimār—3日—aṣ-Ṣanf—陸海100—Lūqīn—海4日  
陸20日—Khānfū—8日—Khānjū—20日—Qānṭū

(18) Baghdād—4—as-Saylaḥīn—8—al-Anbār—7—ar-Rabb—12—Hīt—7—an-Nāwūsa  
—7—Ālūsa—6—al-Fuḥayma—12—an-Nahya—6—ad-Dāziqī—6—al-Furḍa—6—  
Wādī as-Sibā—5—Khalīj Banī Jumay—7—al-Fāsh—8—Nahr Sa'īd—14—al-Jardān—  
11—al-Mubārak—8—ar-Raqqa

ar-Raqqa—Dawsar—Bālis—Khushāf—an-Nā'ūra—Ḥalab—  
Qinnasrīn—Shayzar—Ḥamāt—Ḥimṣ

Ḥimṣ—16m.—Jūsiya—30m.—Qārā—12m.—an-Nabk—20m.—al-Quṭayyifa—24m.  
—Dimashq

Dimashq—12m.—al-Kuswa—24m.—Jāsim—24m.—Fīq—6m.—Ṭabarīya

Ṭabarīya—20m.—al-Lajjūn—20m.—Qalansuma—24m.—ar-Ramla

Bayt al-Maqdis—18m.—ar-Ramla, Bayt al-Maqdis—13m.—Masjid Ibrāhīm,  
ar-Ramla—8m.—Yāfā Bayt al-Maqdis—4m.—「臭い湖」

ar-Ramla—12m.—Azdūd—20m.—Ghazza—16m.—Rafaḥ—24m.—al-'Arīsh—18m.  
—al-Warrāda—18m.—ath-Tha'āma—20m.—al-'Udhayb—24m.—al-Faramā—30m.—  
Jurjīr—24m.—al-Ghādīra—18m.—Masjid Quḍā'a—21m.—Bilbays—24m.—al-Fuṣṭāṭ

al-Fuṣṭāṭ—24m.—Dhāt as-Sāhil—30m.—Tarnūṭ—22m.—Kawm Sharīk—24m.  
—ar-Rāfiqa—30m.—Qarṭasā—24m.—Kiryawm—24m.—al-Iskandarīya—20m.—  
Būmīna—18m.—Dhāt al-Ḥumām—34m.—Ḥanīya ar-Rūm—30m.—at-Ṭāḥūna—24m.  
—Kanā'is al-Ḥadīd—30m.—Jubb al-'Awsaj—30m.—Sikka al-Ḥammām—25m.—Qaṣr  
ash-Shammās—15m.—Khirba al-Qawm—35m.—Kharā'ib Abī Ḥalīma—20m.—al-'Aqaba  
—20m.—Marj ash-Shaykh—30m.—Ḥayy 'Abd Allāh—30m.—小Jiyād—35m.—Jubb  
al-Mayda'an—35m.—Wādī Makhīl—35m.—Jubb Ḥalīmān—35m.—al-Maghār—25m.  
—Takānīst—25m.—an-Nadāma—6m.—Barqa

Barqa—15m.—Malītiya—29m.—Qaṣr al-'Asl—12m.—Awbarān—30m.—Sulūq—  
24m.—Barsamt—20m.—Balbad—24m.—Ajdābiya—20m.—Ḥarqara—30m.—Sabkha  
Manhūshā—34m.—Qaṣr al-'Aṭīsh—34m.—al-Yahūdīyatayn—34m.—Qabr al-'Ibādī—  
34m.—Surt—13m.—al-Qaryatayn—30m.—Quṣūr Ḥassān b. an-Nu'mān al-Ghassānī—  
40m.—al-Manṣaf—24m.—Tawarghā—20m.—Raghūghā—18m.—Wardāsā—22m.—  
al-Muḥtanā—20m.—Wādī ar-Raml—24m.—Ṭarābulus—24m.—Sabra—20m.—Bi'r

- al-Jammālīn—30m.—Qasr ad-Daraq—24m.—Abārdakht—30m.—al-Fawwāra—30m.—  
Qābis—13m.—Bi'r az-Zaytūna—24m.—Katāna—30m.—Alīsar—24m.—al-Qayrawān,  
Ifrīqiya—2marhala—Tūnus, Tūnus—6—al-Andalus の陸地 —5 日 —Qurṭuba,  
Ifrīqiya—1 月 —Tāhart, Tāhart—25 日 —Tilimsīn, Tāhart—24 夜 —Fās, as-Sūs al-  
Adnā—20 余日 —as-Sūs al-Aqṣā, Ṭulayṭula—20 夜 —Qurṭuba  
(19) Baghdād—4—al-Baradān—5—'Ukbarā—3—Baḥamshā—7—al-Qādisiyya—3—  
Surra Man Ra'a—2—al-Karkh—7—Jabiltā—5—al-Sūdaqāniyya—5—Bārimmā—5—al-  
Sinn—12—al-Ḥadītha—7—Banī Ṭamyān—7—M. al-Mawṣil  
al-Mawṣil—7—Balad—6—Bā'aynāthā—6—Barqa'id—6—Adhrama—5—Tall  
Farāsha—4—Naṣībīn  
Naṣībīn—5—Dārā—7—Kafartūthā—7—Ra's 'Ayn—5—al-Jārūd—6—Ḥiṣn  
Maslama—7—Bājarwān—3—ar-Raqqa  
(20) Naṣībīn—5—Dārā—7—Kafartūthā—6—Qasr Banī Nāzi'—7—Āmid—5—  
Mayyāfāriqīn—7—Arzan  
(21) Āmid—7—Shimshāt—5—Tall Jufr—6—Jarnān—5—Bāmaqdā—7—Jullāb—4  
—ar-Ruhā—4—Ḥarrān—4—Tall Maḥrā—7—Bājarwān—3—ar-Raqqa  
(22) Balad—5—Tall A'far—7—Sinjār—5—'Ayn al-Jibāl —9—Sukayr al-'Abbās—5—  
al-Fudayn—6—Mākisīn—7—Qarqisiyya  
(23) ar-Raqqa—6—'Ayn ar-Rūmīya—7—Tall 'Abdā—7—Sarūj—6—al-Muzaniyya—7  
—Sumaysāt—6—Ḥiṣn Mansūr—10—Malaṭiyya—5—Zibatra—4—al-Ḥadath—5—  
Mar'ash—'Amq Mar'ash, Malaṭiyya—4—Kamakh  
(24) 'Ayn at-Tamr—al-Akhdamiyya—al-Khafiyya—al-Khalat—Suwā—al-  
Ujayfir—al-Ghurraba—Buṣrā  
(25) ar-Raqqa—Dawsar—Dāqīn—Jisr Manbij—Manbij—Ḥalab—al-  
Athārib—'Amq—Antākiya—al-Lādhīqiyya—Jabala—Aṭrābulus ash-  
Sha'mīya—Bayrūt—Ṣaydā—Ṣūr—Qadas—Qaysariyya—Arsūf ash-  
Sha'mīya—Yāfā—'Asqalān—Ghazza  
(26) ar-Raqqa—24m.—ar-Ruṣāfa—40m.—az-Zarrā'a—36m.—al-Qaṣṭal—30m.—  
Salamīya—24m.—Ḥimṣ—18m.—Shamsīn—22m.—Qārā—12m.—an-Nabk—20m.—  
al-Quṭayyifa—24m.—Dimashq  
(27) al-Ḥīra—al-Quṭqūṭāna—al-Buq'a—al-Abyad—al-Ḥūshī—al-Jam'  
—al-Khaṭī—al-Jubba—al-Qulūfī—ar-Rawārī—as-Sā'ida—al-Buqay'a  
—al-A'nāk—Adhri'āt—宿—Dimashq  
(28) Ḥalab—7 駅—Qinnasrīn—4 駅—Antākiya—4 駅—al-Iskandariyya—7 駅—al-

Maṣṣīṣa—3 駅—Adhana—5 駅—Ṭarsūs

(29) Ṭarsūs—12m.—al-‘Ullayq—12m.—(ar-Rahwa—)al-Jawzāt—7m.—al-Jardaquḥ—7m.—al-Badhandūn—10m.—Mu‘askar al-Malik—12m.—Wādī at-Ṭarfā’—20m.—Minā—12m.—Nahr Hiraqla—8m.—M. al-Libn—15m.—Ra’s al-Ghāba—16m.—al-Maskanīn—12m.—‘Ayn Burghūth—18m.—Nahr al-Aḥsā’—18m.—Qūniya 廓外—15m.—al-‘Alamayn—20m.—Abrūmasmāna—12m.—Wādī al-Jawz—12m.—‘Ammūriya al-‘Alamayn—15m.—Qu. Naṣr al-Afrītī—10m.—al-Basilyūn 湖頭—10m.—as-Sind—18m.—Ḥiṣn Sinnāda—25m.—Mu‘ul—30m.—Ghāba ‘Ammūriya—15m.—Qu. al-Ḥarrāb—2m.—Ṣāgharī—12m.—al-‘Ilj—15m.—Falāmī al-Ghāba—12m.—Ḥiṣn al-Yahūd—18m.—Sandābarī—35m.—Darawliya の Marj—15m.—Ḥiṣn Gharūbulī—3m.—Kanā’is al-Malik—25m.—at-Tulūl—15m.—al-Akwār—15m.—Malājina—5m.—Iṣṭabl al-Malik—30m.—Ḥiṣn al-Ghabrā’—24m.—海峡, Nīqiya—30m.—al-Qusṭantīniya

(30) al-Badhandun—al-Karm—an-Nawba—al-Kanā’is—Wafra—Balīsa—Marj al-Uṣquff—Falūgharī—Q. al-Aṣnām—Wādī ar-Riḥ—Nabartī—aṣ-Ṣayd—‘Āyanū—Mūdūyis—Makhāḍa—Q. al-Jawz—al-Ghaṭṭāsīn—Q. al-Baṭrīq—Marj Nāqūliya—Danūs—Ḥiṣn Balūmīn—Quṭayya—ar-Rundhāq—Abidūs—al-Qusṭantīniya, Danūs → Darawliya

(31) Lu‘lu’a—Wādī at-Ṭarfā’—Hiraqla—Zabarla—Sidriya—Burghūth—al-Aḥsā’—Qūniya—Q. Daqaliyās—Q. al-Burj—Mās Qūmis—al-‘Alamayn—Qu. Quṭayya—Īlamī—Darawliya—Ḥiṣn ‘Arandisī—Q. Aqarsūs—Bāsilaqīn • Malājina—Nīqiya 湖—Niqumūdiya—渡場—al-Irniya  
(32) Lu‘lu’a—Nahr at-Ṭarfā’—Khirba Fāriṭa—Ḥiṣn Qanna—‘Abqarsūn—上 Hayr Qarīna—al-Hidā 地方—Fīlaq • Q. Fāriṭa—Kinās 岸—Lāṭa—‘Ammūriya

(33) Surra Man Ra’ā—7 駅—Jabiltā—10 駅—as-Sinn—9 駅—al-Ḥadītha—7 駅—al-Mawṣil—4 駅—Balad—9 駅—Adhrama—6 駅—Naṣībīn—6 駅—Kafartūthā—10 駅—Ra’s ‘Ayn—15 駅—ar-Raqqā—10 駅—an-Naqīra—5 駅—Manbij—9 駅—Ḥalab—3 駅—Qinnasrīn—10 駅—Ṣawwarā—2 駅—Ḥamāt—4 駅—Ḥimṣ—4 駅—Jūsiya—6 駅—Ba‘labakk—9 駅—Dimashq—7 駅—Dayr Ayyūb—6 駅—Ṭabarīya—4 駅—al-Lajjūn—9 駅—ar-Ramla—17 駅—al-Jifār—19 駅—al-Bārūrīya—al-Fuṣṭāṭ—13 駅—al-Iskandarīya—30 駅—Jubb ar-Raml

(34) Sinn Sumayra—5 (2 駅)—ad-Dīnawar—29 駅—Zanjān—11 駅—al-Marāgha—2 駅—al-Miyānij—11 駅—Ardabīl—11 駅—Warthān

(35) ad-Dīnawar—7—al-Khabārjān—6—Tall Wān—7—Sīsar—4—Andarāb—5—al-

Baylaqān—6—Barza—8—Sāburkhāst—7—al-Marāgha—11—Dākharrāqān—9—  
 Tabrīz—10—Marand—4—al-Khān—6—Khuwī, al-Marāgha—10—Kūrsara—10  
 —Sarāt—5—an-Nūr—5—Ardabīl—10—Mūqān, Ardabīl—8—Khushsh—6—  
 Barzand—2—Sādarāsb—2—Zaharkash—2—Dū ar-Rūd—1—al-Badhdh, Barzand—  
 12—Warthān, al-Marāgha—6—Janza—5—Mūsā-abādh—4—Barza—8—Jābrawān  
 —4—Narīz—14—Urmīya—6—Salmās

(36) al-Marāgha—Barza—Sisar—Shīz—4—ad-Dīnawar

(34) Warthān—8 駅—Bardha'a—4 駅—Manṣūra Armīniya, Bardha'a—10 駅—Tiflīs,  
 Bardha'a—15 駅—al-Bāb wal-Abwāb, Bardha'a—7 駅—Dabīl

(37) Marand—10—al-Wādī—10—Nashawā—20—Dabīl, Warthān—3—Darmān—  
 9—al-Baylaqān—14—Bardha'a, Bardha'a—30—al-Badhdh

(38) Jurjān—Jurjān 海を 8 日—Khamlīj

(39) Baghdād—7—Jisr Kūthā—5—Qaṣr Ibn Hubayra—7—Sūq Asad—7—Shāhī—5  
 —al-Kūfa

al-Kūfa—15m.—al-Qādisīya—6m.—al-'Udhayb—(15m.—Wādī as-Sibā'<sup>20</sup>) 24m.—  
 al-Mughītha—(14m.—Masjid Sa'd) 32m.—al-Qar'a—(14m.—at-Ṭarf) 24m.—Wāqīsa—  
 (14m.—al-Qubaybāt) 29m.—al-'Aqaba—(13m.—al-Jalḥā') 24m.—al-Qā'—(14m.—al-Juraysī)  
 24m.—Zubāla—(14m.—at-Tanānīr) 21m.—ash-Shuqūq—(14m.—Bardīn) 29m.—al-  
 Bīṭān—(14m.—al-Muhallabīya) 29m.—ath-Tha'labīya—(14m.—al-Ghumays) 32m.—al-  
 Khuzaymīya—(15m.—Baṭn al-Agharr) 24m.—al-Ajfur—(20m.—al-Qarā'in) 36m.—Fayd  
 —(17m.—al-Qurnatayn) 31m.—Tūz—(13m.—al-Fuḥayma) 20m.—Samīrā'—(15m.—  
 al-'Abbāsīya) 33m.—al-Ḥājir—(17m.—Qarawrā) 34m.—Ma'dīn an-Naqra

al-Ma'dīn—46m.—al-'Usayla—36m.—Baṭn Nakhl—22m.—at-Ṭaraf—35m.—  
 al-Madīna

(40) Makka—'Usfān—Qudayd—al-Kharrār—Thanīya al-Mar'a—Mujāj—  
 —Marjīh—Marjīh Dhi l-Ghaḍwayn—Dhāt Kishd—al-Ajrad—Dhū Samur—  
 —A'dā—al-'Ithbāna—al-Qāḥa—al-'Arj—Thanīya al-A'yār—Rī'm—  
 Qubā

(39) al-Madīna—6m.—ash-Shajara—12m.—Malal—19m.—as-Sayāla—34m.—ar-  
 Ruwaytha—36m.—as-Suqyā—29m.—al-Abwā'—27m.—al-Juḥfa—27m.—Qudayd—  
 24m.—'Usfān—33m.—Baṭn Marr—16m.—Makka

Ma'dīn an-Naqra—(16m.—as-Samt) 33m.—Mughītha al-Māwān—(14m.—Arīma) 24m.  
 —ar-Rabadha—(12m.—Sharawarā) 24m.—Ma'dīn Banī Sulaym—(13m.—al-Kunābayn)  
 26m.—as-Salīla—(12m.—as-Sanja) 21m.—al-'Umaq—(15m.—al-Kurā') 32m.—al-Ufay'iya

—(14m.—al-Kibrāna)34m.—al-Mislah—(8m.—al-Qaṣr)18m.—al-Ghamra—(12m.—Awṭās)26m.—Dhāt ‘Irq—(11m.—Ghamr Dhī Kinda)22m.—Bustān Banī ‘Āmir—(11m.—Mushāsh)22m.—Makka

(41) Makka—Bi’r Ibn al-Murtafi’—Qarn al-Manāzil—at-Tā’if, Makka—  
‘Arafāt—Batn Na‘mān—‘Aqaba Hirā’—小坂—at-Tā’if

(42) Makka—Bi’r Ibn al-Murtafi’—Qarn al-Manāzil—al-Futuq—Ṣafn—  
Turaba—Karā—Ranya—Tabāla—Bīsha Bu‘ṭān—Jusadā’—Banāt  
Ḥarb—Yabambam—Kutna—ath-Thujja—Sarūm Rāḥ—al-Mahjara—  
‘Ariqa—Ṣa‘da—al-A‘mashīya—Khaywān—Athāfit—Ṣan‘ā’

(42’) Ṣan‘ā’—24—Khaywān—16—Ṣa‘da—20—al-Mahjara, Ṣan‘ā’—42—Ṣudā  
(· Ju‘fī · Shanū’a)—30—Ḥaḍramawt, Ṣan‘ā’—16—Dhimār—8—Nasafān(· Kaḥlān)—  
20—Ḥujr · Badr—24—Q. ‘Adan, Ṣan‘ā’—16—Dhimār—8—‘Alw Yaḥṣīb—8—as-  
Saḥūl—8—ath-Thujja—8—al-Janad, Ṣan‘ā’—8—al‘Urf—10—Alhān—14—Jublān  
—12—Zabīd · Rima’

(43) Ghamra—49 駅—Ṣan‘ā’, Ṣan‘ā’—4 駅—Dhimār, Dhimār—7 駅—‘Adan,  
Dhimār—4 駅—al-Janad, Ṣan‘ā’—7 駅—Ma’rib, Ma’rib—9 駅—‘Andal

(44) Masjid Sa‘d—Bāriq—al-Qala’—Salmān—Uqur—al-Akhādīd—  
‘Ayn Ṣayd—‘Ayn Jamal—al-Baṣra

(45) al-Baṣra—al-Manjashāniya—al-Ḥufayr—ar-Ruḥayl—ash-Shajīr—  
al-Kharjā’—al-Ḥafar—Māwīya—Dhāt al-‘Ushar—al-Yansū’a—as-Sumayna  
—an-Nibāj—al-‘Awsaja—al-Qaryatayn—Rāma—Immara—Ṭikhfa  
—Darīya—Jadīla—Falja—ad-Dafīna—Qubā—Marrān—Wajra  
—Awṭās—Dhāt ‘Irq—Bustān Banī ‘Āmir—Makka

(46) al-Yamāma—al-‘Ird—al-Ḥadīqa—as-Sayḥ—ath-Thaniya—Saqīrā’  
—as-Sudd—Ṣadāt—Shurayfa—al-Qaryatayn—Makka

(47) ‘Umān—Faraq—‘Awkalān—Habāt 海岸—ash-Shiḥr—Mi. Kinda  
—Mi. ‘Abd Allāh b. Madhhij—Mi. Lahj—‘Adan Abyan—真珠漁場—  
Mi. Banū Majīd—al-Manjala—Mi. ar-Rakb—al-Mandab—Mi. Zabīd—  
Ghalāfiqa—Mi. ‘Akk—al-Ḥirda—Mi. Ḥakam—‘Athr—Dankān 港—  
Ḥaly 港—as-Sirrayn—Aghyār—al-Hirjāb—ash-Shu‘ayba—宿—Judda  
—Makka

(48) Khawlān Dhī Suḥaym—al-‘Ursh—Bīsha Bu‘ṭān—Wādī Dankān—Ḥaly—  
—Bīsha Ibn Ja’wān—Qanawnā—al-Ḥasaba—Dawqa—‘Ulyab—Yaba—  
—宿—al-Līth—Yalamlam—Malikān—Makka



- (49) al-Fuṣṭāt-----al-Jubb-----al-Buwayb-----Ibn Bunduqa宿-----‘Ajrūd-----adh-Dhanaba-----al-Kursī-----al-Ḥafar-----宿-----Ayla-----Ḥaql-----Madyan-----al-Aghrā’-----宿-----al-Kilāba-----Shaghb-----Badā-----as-Sarḥatayn-----al-Bayḍā’-----Wādī al-Qurā-----ar-Ruḥayba-----Dhū l-Marwa-----al-Marr-----as-Suwaydā’-----Dhū Khushub-----al-Madīna-----Makka
- (50) Dimashq-----宿-----宿-----Dhāt al-Manāzil-----Sargh-----Tabūk-----al-Muḥdatha-----al-Aqra’-----al-Junayna-----al-Ḥijr-----Wādī al-Qurā-----ar-Ruḥayba-----Dhū l-Marwa-----al-Marr-----as-Suwaydā’-----Dhū Khushub-----al-Madīna-----Makka
- (51) al-Baṣra-----宿-----Kāzima-----宿-----宿-----宿-----宿-----al-Qar’a’-----Ṭakhfa-----as-Ṣammān-----宿-----宿-----宿-----Jubb at-Turāb-----宿-----宿-----Sulayma-----an-Nubāk-----al-Yamāma
- (52) al-Yamāma-----al-Kharj-----Nab’a-----al-Majāza-----al-Ma’din-----ash-Shafaq-----ath-Thawr-----al-Falaj-----aṣ-Ṣafā-----Bi’r al-Ābār-----Najrān-----al-Ḥimā-----Barānis-----Marya’-----al-Mahjara-----Ṣan’a’

## VI

これらを整理し、肉付けしてみる。

まず、東方には2つの幹線道路：Khurāsān 道（東方北道）と al-Baṣra・Fāris 道（東方南道）が走っている。

東方北道は Baghdād の Khurāsān 門（東北門）を発し、an-Nahrawān・ad-Daskara・Jalūlā を経て、al-‘Irāq から al-Jibāl に入る。Ḥulwān・Qarmīsīn (Kirmanshah)・Qaṣr al-Luṣūṣ (Kanguvar)・Hamadhān・Sāwa・ar-Rayy, Qūmis の al-Khuwār・Simnān・Qūmis 即ち ad-Dāmaghān を通り、Khurāsān に達する。Naysābūr・Ṭūs・Sarakhs・Marw・Āmul を通過、Balkh 河（アムダリア）を渡り、Mā Warā’ an-Nahr の Bukhārā・Karmīniya・Zarmān・Samarqand・Zāmīn に至る。ここから、一方は ash-Shāsh 河（シルダリア）を渡り、Banākat・ash-Shāsh・鉄門・Isbijāb・Ṭarāz・Birkī に、他方は Khujanda・Farghāna 即ち Akhsīkat・Ūsh・Ūzkand に通じる。更に上 Nūshajān で合流し、at-Tughuzghuz 可汗の町まで達する。又、両路はそれぞれ天山北路と南路に連絡し、唐の長安へ通じていた。

Marw から Marw-ar-rūdh・at-Ṭālaqān・al-Fārayāb・ash-Shubūrqaṇ・Balkh に進み、一方は Jayḥūn を渡り、Mā Warā’ an-Nahr の at-Tirmidh・aṣ-Ṣaghāniyān・ar-Rāst へ、他方は Khulm ほか上 Ṭukh-āristān へ通じる支道や、ar-Rayy から Qazwīn・Zanjān へ達する分道もある。

東方南道は Baghdād の al-Baṣra 門（東南門）を出で、al-Madā’in・Jarjarāyā・Jabbul・Wāsiṭ を通り、水路により al-Baṣra に進む。Wāsiṭ と al-Baṣra からは al-Ahwāz へ道が通じ、Sūq al-Ahwāz に

達する。次いで Rām Hurmuz を通り、Fāris の Arrajān・an-Nawbandajan・Shīrāz に至る。更に進めば、[北路: Iṣṭakhr・] Ṣāhik [・北路: Shahr Bābak ], Kirmān の Bīmānd・as-Sīrajān [・南路: Jīruft ]・Bamm・Narmāshīr・al-Fahraj を通り、一方は al-Mafāza (大沙漠) を越えて Sijistān の主都即ち Zaranj へ、他方は Makrān の Fannāzbūr, Quṣḍār, as-Sind の Asrūshān・al-Manṣūra へと達する。

Khurāsān 道への連絡道も走り、Sūq al-Ahwāz・Īdhaj 及び Shīrāz から、al-Jibāl の Iṣbahān を経て ar-Rayy へ、Shīrāz から Iṣṭakhr・Abarkūya・Yazd・Sāghand, [大沙漠], Kūhistān の at-Ṭabas・at-Turayshīth を経て、Naysābūr へ至る。Zaranj から、Khurāsān の Harāt を通り Naysābūr へ通じる。その他、Shīrāz から Fāris の分道が放射し、Fasā・Darābjird, Jūr, Sābūr へと向かう。

又、東方には 2 つの海路: ‘Adan 航路と al-Hind・as-Ṣīn 航路が伸び、al-Baṣra から前者は al-Bahrayn, ‘Umān, ash-Shihr, ‘Adan に至る。これは更に紅海 [Judda, al-Qulzum] 及び東アフリカ [al-Habasha, az-Zanj] へと伸びる。

後者は Fāris 海岸沿いに、Kīs (Qays) 島、Kirmān の Urmūz (Hurmuz), Makrān の Thārā を経て、as-Sind の ad-Daybul に達する。更に al-Hind の Ūtakīn・Sindān (Sanjān)・Mulay (Kūlam Malī)・Ballīn から、Sarandīb, Alankabālūs を経て、[マレーの] Kala に到達する。as-Ṣīn へは、Shalāhit (マラッカ海峡) を抜け、Tiyūma 島,<sup>21)</sup> Qimār, as-Sanf チャンパを経た、Luqīn (交州)・Khānfū (広州) などに至る。途中、Ballīn からは Samandar・Ūranshīn (オリッサ) ほかへ、Kala からは [スマトラの] Bālūs, Jāba へ進むルートが分かれる。この Fāris 沿海路のほか、Fāris の Sīrāf を基点に、‘Umān の Masqaṭ からインド洋を横切り、Kūlam Malī に直行するルートもある。

次に西方に移ると、幹線道路 al-Maghrib 道 (西方道) や ar-Rūm 道が通っている。

西方道は Baghdād の ash-Sha’m 門 (西北門) を出発、一方は al-Anbār から al-Furāt 河に沿い、Hīt・an-Nāwūsa, al-Jazīra の al-Furda を通り、他方は Dijla 河沿いに、‘Ukbarā・al-Qādisīya・Surra Man Ra’a, al-Jazīra の Jabiltā・as-Sinn・al-Ḥadītha・al-Mawṣil を経由、Balad・Adhrama・Naṣībīn・Kafartūthā・Ra’s ‘Ayn を通り、それぞれ ar-Raqqa に至る。次いで、本道の一方は Bālis を経て ash-Sha’m に入り、Ḥalab・Qinnasrīn・Ḥamāt・Ḥimṣ・Jūsiyā を通過、他方は ar-Ruṣāfa を経て ash-Sha’m に進み、Salamīya・Ḥimṣ を通る。そして Qārā で合流し、Dimashq・Ṭabarīya・ar-Ramlā・Ghazza へと向かう。支道は ar-Raqqa から Manbij を経て ash-Sha’m に至り、Ḥalab・Antākiya を通って、al-Lādhiqīya・Atrābulus・Bayrūt・Ṣūr・Qaysārīya・Yāfā・‘Asqālān・Ghazza と海岸路を取る。西方道は、更に al-‘Arīsh・al-Faramā・al-Fuṣṭāṭ・Tarnūt・al-Iskandarīya といった Miṣr を通り、Barqa・Sulūq・Ajdābiya, Surt・Ṭarābulus を経て、Ifriqīya の Qābis・al-Qayrawān に至る。その先、Tūnus から海を渡れば、al-Andalus の Qurṭuba へ、又そのまま進めば、al-Maghrib の Tahart・Tilimsīn・Fās へ達する。

この行程は、帝国西部、特にシリアでビザンツの道路網を利用した故に、ar-Raqqa 以東が farsakh

[サーサーン朝使用], 以西が mīl [ビザンツ起源] 表示となる。シリアでは、行政単位 iqlīm [ギリシア語の klima から]・徴税単位 dīnār [ビザンツの denarius 金貨から] の使用なども見られる。帝国東部での行政単位 rustāq [パハラヴィー語の rūstāq から]・徴税単位 dirham [サーサーン朝の drahm 銀貨から] の使用などと好対照を示す。

小アジアを進む ar-Rūm 道は, Ṭarsūs から al-Badhandūn・Mu'askar al-Malik 即ち Lu'lu'a へと「安全の隘路」を抜け, Hiraqla [河]・Qūniya [廓外]・al-'Alamayn に至る。次いで 'Ammūriya [森]・Sandābarī, 或いは Quṭayya を経て, Darawliya [牧草地] に向かい, 一方は Malājina・Ḥiṣn al-Ghabrā'・海峡に, 他方は Nīqiya 湖・Niqumūdiya・al-Irniya に達する。又, al-Badhandūn から Nāqūliya 牧草地・Quṭayya・ar-Rundhāq・Abidūs・海峡へ至る横断路もある。<sup>22)</sup>

北方に転じると, Ādharbayjān・Armīniya 道が見られる。Qarmīsīn の先で Khurāsān 道から逸れ, al-Jibāl の ad-Dīnawar・Sīsar を経て, Ādharbayjān に入り, Barza・al-Marāgha に至る。そして一方は Sarāt・Ardabīl・Barzand・Warthān を通り, Armīniya の Bardha'a へ, 他方は Tabrīz・Marand・Khuwī へ進む。又, Barza からは Urmiya・Salmās へ, Marand からは Nashawā, Armīniya の Dabīl へと通じる。

そして南方には, Makka 道 (南方道) 及び各地からの巡礼道が走っている。

南方道は Baghdād の al-Kūfa の門 (西南門) を発し, al-Kūfa を通過, al-'Udhayb から沙漠に入り, ath-Tha'labīya・Fayd・Ma'dīn an-Naqra に至る。次いで, 一方は al-Madīna を廻って, 他方は al-Ghamra・Dhāt 'Irq を通り直接, Makka に達する。Makka からは, 更に Tabāla を経て al-Yaman に入り, al-Mahjara で al-Yamāma・Najrān からの道と合流, Ṣa'da・Khaywān・Ṣan'a' へと進み, Dhimār・'Adan や, Zabīd へ達する。又, Makka からは at-Ṭā'if へ向かう道もある。

巡礼道には, 上述の al-Kūfa 路のほか, an-Nibāj・al-Qaryatayn・Darīya・Dhāt 'Irq を通る al-Baṣra 路及び al-Qaryatayn で合流する al-Yamāma 路, 'Umān から ash-Shihr・'Adan・Zabīd・Judda を進む海岸路, al-Fuṣṭaṭ から Ayla・Wādī al-Qurā・al-Madīna を通る Miṣr 路及び Wādī al-Qurā で合流する Dimashq 路などが見られる。

更に, 帝国の 4 方には駅逓道が伸びている。Surra Man Ra'a・Baghdād を基点に, 東北はほぼ Khurāsān 道と同じ道筋を取り, Khurāsān の西の中心 Naysābūr まで, 東南は Wāsiṭ から Sūq al-Ahwāz に進み, Fāris の主都 Shīrāz・Iṣṭakhr まで達する。又, al-Jibāl を南北に走る。西は Dijla 路を取り, ar-Raqqa から多少ずれる道を進み, Barqa の入口 Jubb ar-Raml まで達する。途中, Ḥalab から ash-Sha'm 辺境を Ṭarsūs へも走る。北は al-Jibāl の Zanjān を通り, Ādharbayjān から Armīniya の中心 Bardha'a へ, 更に Tiflīs や al-Bāb wa l-Abwāb (Darband) など辺境へ通じる。南は al-Yaman の主都 Ṣan'a' 以遠, 'Adan や Ḥaḍramawt の 'Andal まで伸びる。

これはアッバース朝の勢力範囲を知る目安となろう。そして, Ṭarsūs・Tiflīs・al-Bāb など北方辺境に駅逓網が及んでいることは注目に値する。なお, 東方・西方の al-Jazīra と ash-Sha'm・北

方の *Ādharbayjān* では、宿駅が平均2 *farsakh* ・6 *mīl* (約11.5キロ) 毎に、西方の *Misr* ・南方の沙漠と *al-Yaman* では、平均12 *mīl* ・4 *farsakh* 毎に置かれている。

最後に、4 幹線の道筋は 9 世紀の他の地理書にも見られることを付け加えておく。即ち、*al-Ya'qūbī* の『国々の書』[東方北道：*Bukhārā* まで、東方南道：*al-Baṣra* まで、西方道：*Ḥalab* から、南方道：*Makka* まで、略述]、*Ibn al-Faṭḥ* の『国々の書』[東方北道：*ar-Rayy* から、東方南道：*Sūq al-Ahwāz* から *as-Sīrajān* まで、西方道 *Ṭabarīya* から *ar-Ramla* まで、略述]、*Ibn Rusta* (913年以後没) の *K. al-A'lāq an-Nafīsa* 『貴重品の書』[東方北道：*Naysābūr* ・*Tūs* まで、東方南道：*Shīrāz* まで、南方道：*Makka* まで、詳述]、*Qudāma* の『租税と書記術の書』[東方北道と南方道：全行程、東方南道：*Zaranj* まで、西方道：*ar-Raqqa* からが *ar-Ruṣāfa* 経由の全行程、類述] などであり、同じ道筋が記されている。但し、東方北道では *Qaṣr al-Luṣūṣ* から *Asad-abādh* を通<sup>24)</sup>って *Hamadhān* に達しており、東方南道では途中の主要地点にずれが現れる。又、南方道でも途中の夕食地点に相違が見られ、*al-Madīna* ・*Makka* の間に新地点が加わるなど、それぞれ局地的には変化が出てくる。

## VII

イラク・バグダードを中心に置き、4 方位に分けて記述する方法は、各方位の始めに *iṣbahbadh* (将軍) を挙げる<sup>28)</sup> ことから推察されるように、サーサーン朝の4 属州制を扱うパハラヴィー語の行政地理書に倣ったものである。この記述方法は、*al-Ya'qūbī* の地理書にも用いられ、「諸道と諸国の学」におけるペルシアの影響を示す 1 例となる。<sup>29)</sup>

又、内容は 4 大街道を中心とする諸道の行程と各州の地名が大半を占め、文章が機械的で無味乾燥の感を与える。7 部は '*ajā'ib*' を扱い、趣を異にするが、付録として書かれたものである。

しかし、その単調さにもかかわらず、この書は広く行き渡り、多数の地理家に利用された。明白な者だけでも、*Ibn al-Faṭḥ*、*Ibn Rusta*、*al-Jayhānī*、*al-Mas'ūdī*、*Ibn Ḥawqal*、*al-Muqaddasī*、*al-Bīrūnī*、*al-Idrīsī* (1166年没)、*Yāqūt* (1224年没)、*Abu l-Fidā'* (1331年没)、*Ibn Khaldūn* (1406年没)、*al-Maqrīzī* (1442年没) などに及ぶ。<sup>30)</sup>

以上でイブン＝ホルダーズベの『諸道と諸国の書』の紹介を終るが、9 世紀のイスラム世界を中心に扱った、異彩を放つ地誌作品であり、アッバース朝の行政、経済を知る上でも、当時の東西交通を研究する上でも、欠くことの出来ない文献であることは想像に難くない。

註

- 1) 7天7地: 65章12節 2大海: 25章53節
- 2) Ibn al-Faḡīh, K. al-Buldān, ed. M. J. de Goeje, BGA, v, Leiden, 1885, pp.3-4 [‘Abd Allāh bn ‘Amr bn al-‘Āṣに帰せられる]. al-Mas‘ūdī, K. Akhbār az-Zamān, Beirut, 1966, p.40 [Ibn ‘Abd al-Hakamに帰せられる].
- 3) この前後に al-Marwazī (887年頃没) と as-Sarakhsī (899年没) も同名の書を著したと伝えられる (Ibn an-Nadīm, K. al-Fihrist, ed. Gustav Flügel, Leipzig, 1871, p.150, pp.261-62; al-Mas‘ūdī, K. at-Tanbīh wa l-Ishrāf, ed. M.J. de Goeje, BGA, viii, Leiden, 1894, p.75).
- 4) R. Blachère et H. Darmaun, Extraits des Principaux Géographes Arabes du Moyen Age, Paris, 1957, p.112
- 5) 一地方を扱う al-Hamdānī (945年没) の K. Šifat Jazīrat al-‘Arab 『アラビア半島誌』も生まれる。
- 6) K. Adab as-Simā' 『聴取作法の書』 K. at-Ṭabīkh 『料理術の書』 K. al-Lahw wa Malahī 『娯楽と楽器の書』 K. ash-Sharāb 『酒の書』 K. an-Nudamā' wa l-Julasā' 『酒席の友達の書』を物した (Ibn an-Nadīm, K. al-Fihrist, p.149).
- 7) Ḥajjī Khalīfa, K. Kashf az-Zunūn ‘an Asāmī al-Kutub wa l-Funūn, ed. G. Flügel, vol. II, Leipzig, 1837 p.101
- 8) BGA, vi, p.xx
- 9) Qabādh サーサーン朝19代カワード1世 (在位488-531), ‘Umar b. al-Khattāb 正統カリフ2代 (在位634-644), al-Ḥajjāj ヒジャーズ・イラク知事 (718年頃没)。
- 10) ‘Abd Allāh b. Ṭāhīr はホラーサーン知事で844年没。211-12年は西暦826-28年。
- 11) Mukrān マクラーン州やインドの一部を含む。
- 12) フランス南部ナルボンヌまで入る。
- 13) Muslim b. Abī Muslim al-Jarmī カリフ al-Wāthiq 時代の人。
- 14) 873年没。なお、カリフ al-Wāthiq は在位842-47年。
- 15) エジプトの征服者, 692年頃没。
- 16) 886年以後没。なお、Ibn Ṭūlūn はエジプトのトゥールーン朝の始祖 (在位868-883)。
- 17) 無記は farsakh (約3.2マイル), m. は mīl (1/3 far sakh) を意味する。又 marḥala は約1日の行程である。
- 18) Q. は qarya (村), M. は madīna (町), Qu. は quran (村々), J. は jazīra (島), Mi. は mikhlaḥ を指す。
- 19) 陸上24 farsakh とある。
- 20) 括弧の中は al-muta ‘ashshā (夕食地) である。
- 21) マレー半島東岸の島 Pulo Tioman.
- 22) Tarsūs は Tarsus, Lu‘lu’a は Lou lon, Hiraqla は Heraclea, Qūniya は Iconium, Sandābarī は Santabaris, Quṭayya は Cotyæum, Darawliya は Dorylæum, Malājina は Malagina, Nīqiya は Nicæa, Niqumūdiya は Nicomedia, al-Irniya は Hieria, Nāqūliya は Nakuleia, ar-Rundhāq は Ryndakos, Abidūs は Abydos.
- 23) 行政官向けの書だが、アダブ的要素も含まれている。いわば、「諸道と諸国の学」と「国々の奇事の学」の接点にある作品。
- 24) その他、Ibn Rusta では、クーミス州の Badhash の次は al-Mūrjan, Hafdar と読める (ed. M. J. de Goeje, BGA, vii, Leiden, 1892, p.170)。
- 25) Baghdād の次に Kalwādha, al-Madā’in の後に Sīb Banī Kūnā, Jabbul の前に an-Nu‘māniya が現れる (al-Ya‘q. ūbī, K. al-Buldān, ed. M. J. de Goeje, BGA, vii, p.321; Ibn Rusta, 同 p.186; Qudāma, K. al-Kharāj wa Ṣan‘at al-Kit āba, ed. M. J. de Goeje, BGA, vi, p.193)。  
又アハワーズ州の Azam から al-‘Ayn を通り、Khābarān を経て Dihlīzān に達する記述も見られる (Ibn Rusta, p.189; Qudama, pp.194-95)。
- 26) 例えば、Ibn Rusta では al-‘Aqaba の手前の夕食地が as-Samā’, al-Khuzaymīyā の手前のそれが al-‘Ayn となっている (pp.175-76)。
- 27) as-Sayāla ~ as-Suqyā 間に ar-Rawhā’ と al-‘Arj が加わる (al-Ya‘qūbī p.314)。
- 28) 東方には so (=Khurāsān) の isbahbadh Bādhūsān と4人の marzubān (p.18)。西方には Khurbarān isbahbadh (p.72)。北方には Adharbādhkān isbahbadh (p.118), 南方には Nīmrūz isbahbadh (p.125) が記載されており、Khurbarān isbahbadh と Adharbādhkān isbahbadh に関しては、ペルシア人の時代にそう呼ばれたとある。

- 29) Ibn al-Faqīh や Ibn Rusta になると、ペルシアの模倣から抜け出し、アラビア・メッカ中心、地方別記述をとる。10世紀の地理学者達は更に1歩進めて、イスラム圏の地方だけに記述を限定する。
- 30) al-Mas'ūdī: 前掲書及び K. at-Tanbīh wa l-Ishrāf 『警告と改訂の書』, al-Bīrūnī: K. al-Āthār al-Bāqīya 'an al-Qurūn al-Khāliya 『過去の残跡の書』 他, al-Idrīsī: K. Nuzha al-Mushtāq fī Ikhtirāq al-Āfāq 『諸国踏破熱望者の楽しみの書』, Yāqūt: K. Mu'jam al-Buldān 『国々のいろは』, Abu l-Fidā': K. Taqwīm al-Buldān 『国々の調査表』, Ibn Khaldūn: K. al-'Ibar 『実例の書』, al-Maqrīzī: K. al-Mawā'iz wa l-I'tibār fī Dihkr al-Khitat wa l-Āthār 『新地と古跡の陳述における警告と考慮の書』, 他の者は全て前掲書による。
- 補) Ibn Khurḍādhbih が明示している情報源は上述した, 'ajā'ib 関係の Ibn al-Kalbī, al-Jāhiz, al-Jarmī, Sallām, Muḥammad b. Mūsā などの他, 租税関係の al-Faḍl b. Marwān (847年・863年税務庁長官, 665年没)(P. 21 Iṣbahān と Qumm, pp.42–43 al-Ahwāz, p.48 Fāris) や税務庁 (p.144 al-Yaman) などもある。